

トンチャイ・ウィニッチャクン

『地図がつくったタイ』

——国民国家誕生の歴史』

石井米雄（訳），明石書店，2003

Thongchai Winichakul. 1994. *Siam Mapped: A History of the Geo-body of a Nation*.
Honolulu: University of Hawai'i Press.

地図がつくったタイ

国境紛争や国境の画定という話題を時々耳にすることがあるだろう。一つの国が領土を保有し、主権を行使し、その領土は明確な国境線に区切られた地図として示される。領土争いが生じると、時に古い地図や記録を持ち出してその根拠を提示し、係争地が我国に帰属することを主張する。こうしたことは、いわば当たり前の話として受けとめられているのではないか。——本書は、シヤム（タイ）を事例にこうした当たり前とみなされる事象に、歴史的視点から再考を促す。国民国家の地理的領域に関する研究は限られ、かつ「これまで、前近代的な言説の場において発生した出来事を、近代的な空間概念の存在を前提に説明するという、誤解を招く歴史解釈が横行してきた」と著者トンチャイは指摘する（p.48）。こうした研究状況に対して、本書は領域や境界をめぐる民俗知の新たな地理学的言説によ

る置換と、それにより生じた紛争、対決、誤解の提示に力点が置かれる。

議論の中心は、19世紀後半における近代的な地理学の導入と、それに基づく地図作成である。しかし検討の対象は、単に測量をして国境を画定し地図を作成するという作業のみではない。「全編を通じての中心的課題は、いかにして地図が、近代的国民国家の^{ネーション}地理的^{ジオボデー}身体を創造したか」(p.49)であり、地理や空間をめぐる前近代的言説と近代的言説の衝突、および後者による前者の置換の瞬間を捉え分析する試みが提示される。なお、「地理的身体」は著者トンチャイ自身の造語であり、「定義は厳密でもなく、議論の余地を残している」(p.47)というが、一つの国民国家の地図が、単に国境で区切られた空間や領域を超え、誇りや愛、憎悪や条理・不条理などの源となり、国民という観念の他の構成要素と結合してその観念にかかわる多くの観念と実践を創出する「一国民国家の^{ネーション}生活形成要素」(p.48)であるという問題提起が含まれていると考えられる。

ではシャムの地理的身体はいかにして生まれたのか。この過程を検討するため、まずシャムの前近代的空間概念を確認する。前近代のシャムには空間をめぐる民俗知として、トライプーム(三界経)を表現した図など複数の空間の語り口があった。こうした中、キリスト教宣教師たちにより新たな地理学と天文学が紹介される。それを取り入れ占星術など既存の知に挑戦したのが、四世王モンクットを中心とする知識人であった。1868年モンクットによるワーコーにおける日蝕観察が新旧の知の衝突の一つのクライマックスであった。

それがさらに暴力的な知の置換となったのは、パークナム事件(1893年)に象徴される英仏の植民地との領土獲得や国境画定、地図作成をめぐる競争であった。1826年イギリスがテナセリム(現在のミャンマーの最南地域)を植民地化して以来、シャムに「国境」の制定を迫るが、当初バンコクの宮廷が理解する「くにざかい」の認識は、中央権力が決定・認証すべきものではなく、幅があり、時に途切れ、その外側に誰にも属さない緩

衝地帯が残されているなど、イギリスのいう「国境」とは似て非なるものであり、両者の交渉はすれ違った。また政治権力間の関係は階層的であり、シャムの周縁には「プラテーサラート」(朝貢国)と称された小王国が存在し、時に複数の大国に二重、三重に服しながら、独自の統治を行っていた。周縁は複数の主権と服属関係が重なりあう流動的な空間だった。

それが19世紀後半、とくに1880年代に至り周縁地域に英仏が進出してくると、シャムのエリートもまた近代的な国境や主権の観念を獲得し、「これらの周辺諸国を征服し、それを排他的主権領域内にとりこむため、ヨーロッパとの抗争に突入した」のであった(pp.188-189)。メコン川流域を断続的に襲撃したホーと称される匪賊を駆逐するという名目で軍隊を派遣するとともに地図作成を進め、実質的な支配を行使したことがなかった地域を我がものにしようとした。したがってシャムは「植民地主義の哀れな犠牲者ではなかった」(p.188)。敗者は、シャム軍とフランス軍の進路にあたった弱小首長国であり、勝者は近代地理学であったということになる(p.238)。

地理的身体と歴史

近代的地理学の導入や地図作成による地理的身体の形成過程とならぶ本書の柱は、地理的身体と歴史およびタイらしさや国民(国家)としての観念との関係である。1893年以降に初めて登場した国境で区切られたシャムの地図により、シャムは地理的身体なるものを獲得した。それは、新たに「主権と国境線という概念で規定される政治空間」であった。この地理的身体は、空間に関する民俗知を置換し、シャムの周縁に存在していた小首長国の重層的に重なる主権を国境で切り分けて清算し、新たな政治空間に君臨するバンコクの王権の統治空間の一部に変換した。

しかもそこで終わりではなかった。人工的産物であった地理的身体は、大地の自然性、共通の起源を示す「チャート」、そして王権の神聖性と結

合して、空間の規定という役割を超えて、新たな価値や文化を創出する一助となっていく。内外を分かち知の基盤となり、敵を創出するとともに、「国民という観念」を表現し、ナショナリズムや愛国主義のメッセージを喚起する手段として利用されていくのである。地図は再生産を重ね、シンボルとしてさまざまな場面で使われる一方、この新たな空間概念は過去と結合して、新たな歴史を生み出していった。

その新しい歴史とは、フランスを貪欲な植民地主義者として、シャムを無辜な犠牲者とする筋立てであった。その語りは「メコン河左岸流域は疑いもなくシャムに帰属していた」という理解を前提とし、フランスにより略奪されたという悲劇となる。そして19世紀末以降進められたシャムの近代化政策は外国の脅威に対抗した防衛手段であり、シャムの独立維持は地方に介入し中央集権化を進めた賢明な王族エリートに帰せられることになる。

こうした歴史の理解がシャムの地理的身体が前近代に遡り存在していたという前提の上に成り立っていると看破するトンチャイの議論は、タイの歴史的連続性と均質性、国王が適切に国家の近代化を推進し、賢明に対処したがゆえに自力で近代的国民に変わった伝統的な国家という理解、そして植民地勢力による領土喪失という通説を覆す。同時に、バンコク中心の視点の下に、自立を保っていた周縁の小王国がその自立性を奪われ、主体を喪失する様を明るみに出す。

史料とディスコース分析

さて本書は、地理的身体形成の歴史的プロセスを追うが、主に依拠した史料は、20世紀初頭にシャムのエリートにより編纂された *Burney Papers* や『史料集成』に納められた各地の年代記など、いずれも公刊された文献である。別言すれば、大学の図書館などで手にすることができるよく知られた史料や文献をまったく新たな視点から読み直すことにより、既存の理

解を覆す議論を提起することが可能であることを示す好例である。

その一方で、本書の議論がこうした史料に制約されていたことを指摘する声もあり、また新たな史料開拓の余地も残されている。この点に関連して、トンチャイの議論が言説分析であることに対して批判が寄せられた点にも留意する必要がある（Wijeyewardene 1991; O'Connor 1997; Thongchai 1996: 73）。

例えばオコナーは、本書がバンコクのエリートに有利なわずかな残存史料に依拠しており、その視点の偏りは、テキストによる表象をリアリティと同等視する理論により強化されていると批判する。また本書における言説はヘゲモニックなモノログであり、他の言説との対話や交渉の余地がないと指摘した。

ここでオコナーの念頭にあったのは、いかにして内なる敵が中国人商人から急進的な学生へと転換したかという問題であった。この点に関連して、中国史研究者ドゥアラも同様の問題提起をしている（Duara 1995）。地理的身体が、あたかも確立した事実として提示されている傾向があるのではないかと指摘し、また領域を基盤にしたネーションフッドの観念との間に緊張を生じさせる他の観念の存在に注意を喚起し、とくに歴史的に問題となってきたエスニック・チャイニーズの存在と地理的身体との関係について課題を提起した。

確かに、タイのナショナリズムを考えるうえで中国系住民の存在は重要な問題の一つであったにもかかわらず、本書においてタイ人らしさや国民としての観念の議論で「中国」(China) や「中国人」(Chinese) にはほとんど言及がなく、索引にも採用されていない。また本書刊行後、19世紀末に民族カテゴリーが生み出され、領域内の人々が文明と野蛮に振り分けられ、野蛮とみなされた人々が他者化される過程を考察した論考を著したが、「中国人」については、重要性は認めつつ、問題の複雑さを理由に検討から除外したと述べる（Thongchai 2000）。複雑かつ研究蓄積がある領域

ゆえの難しさもあるかもしれないが、管見の限り「中国」や「中国人」が地理的身体をめぐる議論にいかに関連するかについては、現時点で検討はなされていないようである。——なお、英仏との国境画定交渉と対中関係や国内の中国系住民の存在とが関連していたことを示唆する史料は、断片的ながら存在する。

いずれにせよ、これからもトンチャイの著作から多くを学びつつ、さらなる問いを立てて思索を深め、新たな史料と歴史の可能性を探り、提示していく必要があろう。もともなった博士論文も含めて本書はナショナリズム研究に多大な貢献をなしたが（アンダーソン 1997: 284-293）、例えばビルマやシャン地域の統治や境界域の調査に従事したジェームス・G・スコットが収集した豊富な地図史料を、在地、植民地権力、そしてグローバルな文脈に置いて検討した研究（e.g. De Rugy 2020）など——国民国家の議論に収れんされない——新たな研究も生まれている。

この挑戦的な著作は、トンチャイ氏自身の1976年10月6日事件の体験に基づくタイ国家やナショナリズムに対する強い問題意識と批判精神に支えられて生まれた。その後10月6日事件について探求を進め、当事者の1人として、そして歴史研究者として、という——必ずしも一致せざる——二つの立場から、その記憶と忘却を現代政治史の文脈において考察した著作を出版した（Thongchai 2020）。本書の理解を深めるためにもあわせて読んでみてはいかがだろうか。

参考・関連文献

- ベネディクト・アンダーソン、白石さや・白石隆（訳）、1997、『想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』（増補版）NTT出版。（原著：Anderson, Benedict. 1991. *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*. Revised edition. London and New York: Verso.）
- 飯島明子、2003、「Nation と Geo-body」『岩波講座 東南アジア史 別巻—東南アジア史研

- 究案内』池端雪浦ほか（編集委員）岩波書店，pp.86-92.
- De Rugy, Marie. 2020. "Looting and Commissioning Indigenous Maps: James G. Scott in Burma." *Journal of Historical Geography*. 69: 5-17.
- Duara, Presenjit. 1995. "Review, *Siam Mapped: A History of the Geo-Body of a Nation* by Thongchai Winichakul." *The American Historical Review*. 100(2): 477-479.
- O'Connor, Richard A. 1997. "Review, *Siam Mapped: A History of the Geo-Body of a Nation*, by Thongchai Winichakul." *The Journal of Asian Studies*. 56(1): 279-281.
- Thongchai Winichakul. 1996. "Maps and the Formation of the Geo-Body of Siam." In Tønnesson, Stein and Hans Antlöv ed. *Asian Forms of the Nation*. Richmond: Curzon, pp.67-92.
- . 2000. "The Others Within: Travel and Ethno-Spatial Differentiation of Siamese Subjects 1885-1910." In Turton, Andrew ed. *Civility and Savagery: Social Identity in Tai States*. Richmond: Curzon Press, pp.38-62.
- . 2020. *Moments of Silence: The Unforgetting of the October 6, 1976, Massacre in Bangkok*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Wijeyewardene, Gehan. 1991. "The Frontiers of Thailand." In Reynolds, Craig J. ed. *National Identity and Its Defenders: Thailand, 1939-1989*. Clayton, Victoria: Centre of Southeast Asian Studies, Monash University, pp.157-190.

❖本書の著者紹介（トンチャイ・ウィニッチャクーン）

ウイスコンシン大学名誉教授。シドニー大学大学院で修士号，博士号（歴史学）を取得した。本書は博士論文をもとにしている。その後ウイスコンシン大学マディソン校歴史学科で長らく教鞭をとった。タイ近現代史研究を専門とし，インテレクチュアル・ヒストリーを中心に数多くの著作がある。

❖執筆者紹介（小泉順子）

京都大学東南アジア地域研究研究所教授。専門はタイ近代史。